



〒975-0031  
福島県南相馬市原町区錦町一丁目 30 番地  
TEL:(0244)26-1315  
FAX(0244)26-1318  
E-mail:sousou.kyoubu@pref.fukushima.lg.jp

## 語り部から聞く震災「ふくしまの今と未来」 南相馬市立原町第三中学校（6/23）

### 語り部から聞く震災「ふくしまの今と未来」とは

児童生徒が、他者の心や「ふるさと福島」を思い、復興を支える人材への成長を促すために、ワークショップ等を開催し、豊かな心の醸成の一助とする。語り部などから震災について話を聞き、自分のこれまでの経験や思いと重ね合わせることで生まれた新たな想いを創作により表出させ、心の復興の一助とする事業です。

今回は、南相馬市立原町第三中学校第3学年を対象に実施しました。

### 語り部からの話(10:15~11:15)

#### 語り部の新川さん

今回の語り部は、普段は双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で語り部活動をしている新川智恵子さんです。新川さんは震災当時、浪江町の請戸地区でお仕事をしており、地震発生時も請戸の地におりました。本日は、震災発生から避難するまでに起こったことを詳細に語っていただき、その中で感じた防災、減災への願い、人と人との絆、故郷への思いなどを子どもたちへ伝えてくれました。

話を聞いた中学三年生は、2011年生まれで、震災の記憶は全くありません。震災の事はお家の方から聞いたり、ニュースで見たり、ネットで調べたりしたとのことでした。また、浪江町の震災遺構請戸小学校や、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れたことのある生徒も数名しかいないということでした。震災の記憶の風化や継承が叫ばれていますが、まさに語り部からの話を聞いてほしい世代です。

### 新川さんが伝えたかった事

新川さんの話から印象的だったのが、「大きな地震が来た後に、自分では避難の仕方が決められなかった」「余震も大きかったのに次第に慣れてしまい、地震が怖くなくなってしまった(感覚の麻痺)」「建物は壊れ、津波の遡上も見たのに仕事を続けようとしていたが、訪問先のおじさんに『仕事してるところじゃないだろう』と強く言われ、ようやく避難しなくてはと思った」ということでした。大きな地震が来たらすぐに避難ということは知っていても実際にその場にいるとなかなか冷静な判断は難しいということがリアルに伝わってきました。

話の中では、津波で亡くなってしまったお爺さんやお婆さんとのエピソードも教えてくださり、震災の恐ろしさと、防災・減災は命をつなぐ未来・希望ということも伝えてくれました。

そして、最も伝えたかったことは、大きな地震や津波等の災害にあってしまったら、「自分の命を守る」「自分で判断し、行動する」ということでした。また、防災のために「意識」「知識」「物」を備えてほしいということも話していただきました。そして、良い連鎖が起きてほしいということが願いだそうです。

原町三中3年生の皆さんは、メモを取ることも忘れて真剣に聞いていました。未来を担う子どもたちが、震災について自分のこととして学ぶ姿は、新川さんの言う「良い連鎖」を生んでいくことでしょう。



## 講話を受けての十七字のふれあい活動(11:25~12:15)

講話を聴いた後は、感想発表の時間でした。

【Aさん】

日常とかけ離れたことが急に起こるので、いざという時に正しい判断ができるようにしたいと思いました。また、いつ大きな災害が起きても良いように、日頃から非常食を用意したり、家族とハザードマップなどで避難場所や経路を確認たりしておくのが大切だと思いました。

【Bさん】

親からも聞いたことがあるけれど、新川さんのお話は、とてもリアルで、今は当たり前に通っている場所もとても大変は被害を受けたということ改めて知ることができました。僕は、本当にこの場所で震災が起きたという実感が前まであまりなかったけど、今回のお話を通してトラウマになるくらいの震災が起こったということを実感することができました。

【Cさん】

私は震災が起きた時、生後まだ6ヵ月で何も覚えていません。ですが、語り部の方や両親などが震災の話をしてくれるので、私は知っています。今後、震災が無かったことのように忘れられてしまうかもしれません。でも、この出来事は忘れられてはいけない話だと思います。それなので、私は自分の知った知識や、教えてもらった知識をもとに、友達や自分の子どもへと震災の事を受け継いでいこうと思いました。



感想発表後は本日の学びや感想をもとに、十七字を通しての交流会です。担当の先生から「絆部門」と「ふるさと部門」で書くことや、ペアで取り組むことなどを教えてもらい、作り始めました。

みんなでよく考え、対話をしながら十七文字に気持ちを込めていました。「復興」「絆」といった単語を使ってとりあえずは書き上げても、友達と話すことによって、「手をつなぐ?」「手を差し伸べる?」5文字と7文字に合う言葉を考えたり、「ありがとう」って使いたいな・・・と気持ちがどんどん明確になったりしていく姿がありました。また「防災や減災について伝えたい」「部活ができるって絆だよね」など、新川さんからの話から自分たちの生活へと広げて考えている子もいました。

中学生が震災について語り合い、十七字で表現していけば、これからも震災の記憶をつないでいけるのではないかと感じさせてくれた活動でした。

### 「今日から始めてみませんか？」

日々の学習や体験活動のふりかえりに 五.七.五「十七字」を活用してみてください!もっと身近に、自由な発想で創作すれば、楽しさも広がります。

夏休みに作ろうとすると、「宿題が多くて大変だなあ。面倒だ」というイメージがついてしまうことがあります。日頃から友達同士(子どもと子ども)や、家族(子どもと大人)で、楽しみながら作る、その瞬間(とき)に作る、五.七.五『十七字』であっていいのかと思います。授業や活動の後に是非ご活用ください。

<令和6年度最優秀作品(絆部門)>

「おかあさん 朝顔が咲いた また咲いた」 (原町二小 一年)

「朝顔の 花が咲くたび 笑顔咲く」 (母)

朝顔が咲いた瞬間、「咲いたよ、咲いたよ、お母さん!」と訴えかける子の姿に、思わず笑顔で返す母の姿。そのときの情景が目には浮かびます。

